

シュヴァルツェスマーケン・えくすとら♪

第2話「恋愛原子核」

1. とんでもない朝

『私、お兄ちゃんが好き・・・お兄ちゃんの為なら何でも出来るよ・・・。』

一糸纏わぬ姿になったリズが泣きそうな表情で、背後からテオドールを抱き締める。そのリズの体の温もり、柔らかい胸の感触に、思わずテオドールは赤面してしまった。

『でも今のままじゃ無理だよ・・・皆に疑われながらなんて戦えない・・・。』

『リ、リズ・・・。』

『でもお兄ちゃんが信じてくれるなら・・・信じられる物をくれるなら・・・。』

潤んだ瞳でテオドールを見つめながら、リズはテオドールの身体をぎゅっと抱き締め・・・

『・・・お兄ちゃん・・・抱いて・・・。』

戸惑うテオドールに、リズは突然唇を重ねてきた。

テオドールもまた何かの激しい衝動に突き動かされ、リズをベッドに押し倒す。

(むにゃむにゃ・・・なんかよく分からねえけど何だこれ・・・柔らかくて温けえなあ・・・。)

(あつ、テオドール・・・お前は意外と大胆な奴なんだな・・・)

これからBETAの大群との決戦が迫っているというのに、俺は一体何をやっているんだろう。

テオドールはそんな事を考えながら、ベッドの中でリズと激しく睦み合う。

自分の眼前でとても幸せそうな表情を浮かべながら、テオドールに身体を任せるリズ。

いや、BETAの大群が迫っているからこそなのか。

これからいよいよ間近に迫る、BETAの大群との戦いで死ぬかもしれない。だからこそ人間が本来持つ強い生存本能が、リズに自分の子供を産ませろと、テオドールの理性に強く訴えているのだろうか。

『はあ、はあ・・・リ、リズ・・・俺は・・・』

『お兄ちゃん、お兄ちゃん、好き好き、大好き、愛してるっ！！』

(テオドール、お前は本当に甘えん坊さんなんだな・・・よしよし、ははは・・・。)

(お兄ちゃん、起こしにきた・・・よ・・・っ！？)

(やあ、おはよう我が妹よ。)

(な・・・な・・・な・・・何でアンタがここに・・・って言うかお兄ちゃんに何やってんのよおおおおお
おおおおおおおおお！？)

もしかしたら俺は、取り返しのつかない事をしてしまっているのかもしれない。

頭の中でそう考えながらも、それでもテオドールは止まらなかった。何かの強い衝動がテオドールの身体を突き動かしていた。

「待て待て待て待て待て待て、俺がいつアンタの夫になったんだよ！？」
「昨日の夜にはっきりと言っただろう。お前を私の未来の夫にするとな。」

あの時のアイリスディーナが自分にキスをしてきた時の、温かくて柔らかい唇の感触。
それを思い出したテオドールは、あまりの恥ずかしさに思わず顔を赤くしてしまったのだった。
そうこうしている間にもアイリスディーナは、せっせとテオドールのパジャマを全て脱がしてしまい、
慣れた手つきで脱がしたパジャマを綺麗に折り畳む。

「・・・ほう、お前はトランクス派なのか。」
「はああああああああああああああああん(泣)！！」

下着姿を見られてしまった・・・。

「ちょっとアイリス！！アンタいい加減にしなさいよ！！」
「何だリズ、まだいたのか。ここは私がやっておくから、お前は先に朝食を摂りに行って構わないぞ？」
「アンタこそ何でしゃばってんのよ！？お兄ちゃんの着替えを手伝うのは私の役目なの！！」
「何を言う、これはテオドールの妻としての私の役目だ。」

涙目になった下着姿のテオドールを放置し、テオドールの制服の奪い合いを始めるアイリスディーナとリズ。

なんかもう、異様な光景が繰り広げられていた・・・。
そんなリズの姿を見て、テオドールは先程観た夢の事を今になって思い出し、またしても顔を赤らめてしまった。

何故、自分とリズがあんなにも激しく互いの身体を求め合い、互いの身体を貪り合い、互いの心と身体を愛し合うという、とんでもない夢を観てしまったのか。

(よ・・・欲求不満なのか？俺は・・・)
「アイリスちゃん、テオドール君起きたー？」
「・・・あ、はいお母様、今着替えさせてる所です。」
「だから、私がお兄ちゃんの着替えを手伝うって、さっきから言ってるでしょ！？」
「私とて譲るつもりはない。だが早くしないと学校に遅刻してしまうぞ。」
「遅刻・・・くっ・・・！！」

仲睦まじいのは結構だが、そろそろ急がないと遅刻する時間帯だ。さすがに自分たちのせいでテオドールに遅刻をさせるわけにはいかない。

そう考えたアイリスディーナとリズは、何故かここで一致団結した。

「・・・そうだね、非常～～～～～に不本意だけど・・・」
「そうだな。誠に遺憾だが、ここは私達2人でテオドールの着替えを手伝うとしよう。」
「いや、ちょっと待て！！俺が1人で着替えるっていう選択肢はお前らには無いのかよ！？」
「「無い。」」

なんかもう物凄い表情で、制服を手にテオドールに迫るアイリスディーナとリズ。
その凄まじい気迫の前に、テオドールは何も抵抗する事が出来ず・・・そして・・・。

「お、おいお前ら・・・ちょっと待て・・・」

「じっとしててねお兄ちゃん。」

「すぐに終わらせてやるからな。」

「や、やめろ、だから俺が1人で着替えるから・・・だから、やめ・・・あああああああああああ」

アッー！！

2. 昼休み

キーンコーンカーンコーン。

起立～、礼～。

4時間目の英語の授業が終わり、いよいよ昼休みの時間がやってきた。

自前の弁当を持参してきた者、購買やコンビニまでパンやおにぎり、弁当を買いに行く者、あるいは近くの定食屋まで食べに行く者・・・中には自宅がすぐ近くにあるので一時帰宅して昼食を済ませる生徒もいるようだ。

「お兄ちゃ～ん、ご飯の時間だよ～。」

そんな中、午前中の授業から解放されて大きく伸びをするテオドールに、リズが手作りの弁当を差し出してきた。

そして自分の机をせっせとテオドールの机にくっつけて、テオドールの正面に座る形になる。

「おう、いつも悪いなリズ。」

「今日のお弁当はサンドイッチだよ。お兄ちゃんの為に愛情を込めて作ってあげたんだから。」

リズはとて料理が上手であり、ただ美味しいだけでなく栄養のバランスまできちんと考えて作られている。それにテオドールへの愛情がたっぷりと込められているのだ。

テオドールがワクワクしながら箱を開けると、中に入っていたのは色鮮やかなサンドイッチだった。

玉子、サラダ、カツ、トマト、チーズ、カレー・・・様々な具材のほのかな香りが、テオドールの食欲を刺激したのだが。

「私もテオドールさんと一緒に昼食を食べます！！」

「テオドール～、一緒にご飯食べよ～♪」

そこへカティアとアネットが即座に乱入してきたのだった。

合体しているテオドールとリズの机に、さらにカティアとアネットの机が合体する。

ここまでは昨日と同じ光景が繰り返されていたのだが・・・。

「テオドール。一緒に昼食を食べに行くぞ。」

今日はわざわざ2年生の教室から、アイリスディーナまで参戦しに来たのだった。

リズの手作りのサンドイッチを食べようとしたテオドールの右腕を、アイリスディーナは情け容赦なく引っ張ろうとする。

「お、おいアイリス、ちょっと待て・・・」

「この学校の近くに最近、日本料理を扱う店が出来たのは知っているか？今日はお前の為に席を予約しておいたんだ。私と一緒にいこう。」

「お生憎様！！お兄ちゃんには私の手作りのサンドイッチがあるのよ！！」

テオドールを取られてたまるものかと、リーズが全身から漆黒のオーラを放ちながら、物凄い表情でテオドールの左腕にしがみつく。

睨み合うリーズとアイリスディーナに挟まれ、テオドールがなんか涙目になってしまっている。

「ぬう、それはお前の手作りの昼食だったのか・・・だが私が予約した日本料理店の方が格別だぞ？」

「この金持ちのボンボンがあ！！そもそも外食ばかりじゃ栄養のバランスが偏るでしょうが！！」

「お前こそ育ち盛りのテオドールに、まさかこのような貧相な食事を毎日させるつもりではあるまいな？」

「あら残念だったわね！！栄養のバランスならきちんと考えてます～！！大体アンタもお兄ちゃんの妻を名乗るなら、自分でお弁当くらい作ってきなさいよ馬～鹿！！」

リーズの反撃に、一瞬言葉に詰まってしまったアイリスディーナだったのだが。

「・・・生憎だったな、私は料理など今まで一度もした事がない！！」

何故か威風堂々とドヤ顔で語ったのだった・・・。

「・・・なあ、アイリス・・・それ、わざわざ自慢する事なのか・・・(汗)？」

「テオドール、お前はどちらを選ぶのだ？私が予約した日本料理店か？それとも我が妹が用意したサンドイッチか？」

「え！？」

いきなりアイリスディーナに2択を迫られ、戸惑いを隠せないテオドール。

リーズもまた、物凄い表情でテオドールに迫ってきた。

「いつから私がアンタの妹になったのよ！？お兄ちゃんには私のサンドイッチを食べるのよ！！」

「い～や私の日本料理店だ！！」

「い～や私のサンドイッチよ！！」

「テオドール！！」

「お兄ちゃん！！」

右腕を引っ張るアイリスディーナ。左腕を引っ張るリーズ。

どちらも決して一步も引かず、絶対にテオドールと一緒に昼食を食べる気マンマンのようだ。

なんかもう、どちらを選んでも收拾が付かない結果になりそうな気がしてきた。

アイリスディーナの日本料理店を選べばリーズに妬まれ、リーズのサンドイッチを選べばアイリスディーナに妬まれる。

どちらを選んでも、待っているのは地獄絵図。

周囲のクラスメイトたちはこの物凄い修羅場を面白がって観戦しており、中にはツイッターや2ちゃんねるで実況する者までも現れる始末だ。

「・・・いや、この状況を打破する選択肢はもう1つある。」

意を決したテオドールは覚悟を決めて立ち上がり・・・

「・・・俺は・・・」

「…俺は？」

リズが作ったサンドイッチの箱を手にして…

「…逃げる(泣)！！」

慌ててダッシュで教室から逃げ出したのだった…。

「あ、待てテオドール！！」

「お兄ちゃん、どこ行くのよおっ！？」

「やかましい！！これじゃあ落ち着いて昼飯が食べねえだろうがよおっ(泣)！！」

物凄い速度で廊下を走るテオドールだったが、アイリスディーナたち4人が一斉にテオドールを追いかけてきたのだった。

慌ててテオドールは近くの教室の中に隠れ、そのまま静かに身を潜めたのだが。

「はあ、はあ、はあ、まったく、一体何なんだよあいつら…」

「…あら、テオドール君？」

教室の中にいたのは、昨日テオドールを文芸部に誘ったファムだった。

慌てて近くの教室の中に身を隠したのだが、どうやら文芸部の部室の中に入ってしまったようだ。ファムは1人で昼食のおにぎりを食べながら、きょとんとした表情でテオドールを見つめている。

「ファ、ファム先輩…。」

「もう、私の事はお姉ちゃんって呼んでくれてもいいのに。」

「いや結構です遠慮しておきます絶対に断固辞退しておきます(泣)。」

「まあそれはそれとして、一体そんなに慌ててどうしたの？」

「じ、実は…」

事情を話したテオドールに、ファムは快く席を提供してくれたのだった。

ファムの席の隣に置かれたパイプ椅子に、テオドールは溜め息をつきながら腰掛ける。

「ならば早くここで身を隠しなさいな。それがリズちゃんが作ったお弁当？」

「え、ええ、まあ…。」

「ふうん、栄養のバランスとかきちんと考えてるのね。さすがはリズちゃんだわ。」

黙々とサンドイッチを食べるテオドールに、ファムは温かい紅茶を提供した。

紅茶から漂う柑橘系の優しい香りは、まるでファムの母性を現しているかのようだ。

「はい、どうぞ。今日はレディグレイにしてみたの。」

「ああ、すみませんファム先輩。」

「そう言えばこの近くに日本料理店が出来たとか、私のクラスメイトも話してたわね。」

「まあ確かに最近はこのドイツにも、日本人が増えてきたのは確かですけど…。ファム先輩みたいにベトナムからの留学生もいる位だし。」

「今日の政治経済の授業でやってたんだけど、ベルリンの壁が崩壊して東西のドイツが統一されてから、異国の人たちの受け入れが積極的に行われるようになったらしいわよ。」

「ここが東ドイツだった頃は、何とかディストピアみたいな国だったらしいですけどね。俺が生

まれる前の話だから、あんまり実感が沸かないんですけど……。」

ファミと話をしているうちに、いつの間にかサンドイッチを完食してしまったようだ。
何とというか、とても親しみやすく話しやすい人だと、テオドールはそう感じていたのだが。

「はい、お粗末様。それじゃあテオドール君にデザートを用意しないとね。」
「いやデザートって、そんなに気を遣ってくれなくても構わないですよ。」
「遠慮なんかしなくていいの。テオドール君は私にとって弟みたいな物なんだから。」
「はあ……。」
「それにテオドール君を文芸部に誘うの、私はまだ諦めてないんだからね？」

ファミはテオドールにデザートを提供する為に、おもむろに立ち上がり……

「……さて、と……。」

何故か突然制服の上着を脱ぎ捨てたのだった。
いきなりの出来事に、嫌な予感を隠せないテオドール。

「……あ、あの……。」
「あら、どうしたの？テオドール君。」
「一応聞いて置きますけど……俺に一体何を用意するつもりなんです？」
「何って……もう……私の口から言わせる気？」

とても恥ずかしそうにしながらも、ファミは制服のブラウスのボタンまでも外し始め……

「……私の、母n」
「うわああああああああ、うわあああああああああああああああああああ(泣)！！」

ファミのブラジャーが頭わになった所で、テオドールは慌てて逃げ出したのだった。
そんなテオドールを、ファミが興奮しながら物凄い表情で追いかけてくる。

「アンタって人はあああああああああああああああああああああ(泣)！！」
「待ってテオドール君、遠慮なんかしなくていいのよ！？テオドール君は私にとって弟みたいな物だって言ってるでしょ！？」
「いや遠慮するわ！！と言うかどんなプレイだよ！？最早弟としての扱いですらねえじゃねえかよおおおおおおおおおおおおおっ！！」

もう何が何だか分からないテオドールだったが、このままファミに捕まってしまえば、人として大切な何かを失ってしまいそうな気がしてきた。

泣きそうな表情で全力で逃げるテオドールだったが、ファミとの距離は一向に広がらない。
いよいよ追いつかれるか……テオドールが軽く絶望した、その時だ。

「テオドール君、こっちだ！！早く入りたまえ！！」
「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！！？」

突然教室から伸びてきたアスクマンの右手がテオドールの左手を掴み、テオドールを強引に教室の中に引きずり込んだのだった。

慌ててドアの鍵を閉めるアスクマンだったが、ドアの奥からドンドンドン！！という激しい音と、ファムの興奮した叫び声が聞こえてくる。

どうやら逃げ回ってる内に、反乱部の部室の前を通りかかってしまったようだ。

「危ない所だったねテオドール君。彼女はこの学校でも危険人物の1人だと、以前君に警告したばかりじゃないか。」

「ぜえ、ぜえ、ぜえ、た、助かりましたよアスクマン先輩……。」

「随分と汗だくだね。さぞかし喉が渴いた事だろう。」

「ええ、随分と走り回ったもん……で……っ！？」

アスクマンは顔を赤らめながら、おもむろに制服の上着を脱ぎ捨てたのだった。

「……あの……アスクマン先輩……。」

「ん？何かな？テオドール君。」

「一応聞いておきますけど……俺に一体何を飲ませようとしてるんです……？」

「何って……もう、私の口から言わせる気かい？」

とても恥ずかしそうにしながらも、アスクマンは制服のワイシャツのボタンまでも外し始め……。

「私の、母n」

ガラガラガッシャー——————ン！！

派手に開かれた扉から、アイリスディーナたち5人が物凄い表情で姿を現したのだった。

そして有無を言わずにアスクマンに殴る、蹴るの暴行を加え続ける。

「ぐはあっ、貴様ら、どうやって扉の鍵をっ！？」

「合鍵だ。貴様がテオドールに接触するだろうと思い、昨日ベアトリクスから貰ってきた。」

「おのれシュター部め！！またしても私の邪魔をするつもりあげびげぼげえっ！！」

ドカツ！！パキッ！！グシャッ！！

ズガガガガガガ——————ン！！

ズキュンズキュンズキュンズキュンズキュン！！

ズドドドドドドドド！！

ちーん。

「総員傾注！！これより我が666小隊は、反乱部部長ハインツ・アスクマンの公開処刑、並びにテオドールの身柄確保の任務を取り行う！！」

「「「了解！！」」」」

アイリスディーナの号令で、何故かリズたちが一斉に敬礼したのだった……。

「……あのさお前ら……さっきまで喧嘩してたくせに、何でそんなに一致団結してるの(汗)？」

「待たせたなテオドール……そうかりズの弁当を完食してしまったのか……誠に遺憾ではあるが、まあリズの想いが込められた弁当を粗末に扱う訳にもいかんしな。」

「て言うか666小隊って一体何(泣)！？」

何故か聞き覚えのある名前のような気がしたのだが、最早今のテオドールにはそんな事を気にする余裕さえも無かった。

ずんずんと、物凄い表情でテオドールに迫るアイリスディーナたち。

「だが安心しろ。予約していた日本料理店にキャンセル料を払うのも気が引けるので、この合鍵の礼としてベアトリクスとカトリーヌを招待しておいた。」

「俺の話聞いている(泣)！？」

「さて、今から私たちは昼食を摂る為に教室に戻るが・・・お前はただ見ているだけでいいんだ。私たちがキャッキュウフしながら、とても幸せそうに昼食を食べている光景をな。ふふふ・・・。」

アイリスディーナたちの凄まじい気迫の前に、テオドールは何も抵抗する事が出来なかったのだった・・・。

「待っててお兄ちゃん、今、目覚めさせてあげるーーーーー！！」

「や、やめろリズ、目覚めさせるって何を・・・や、やめ、あ、あああ、あああああああああ」

アッー！！

3. ファミレスでバイト

「いらっしやいませ、3名様でよろしかったですか？只今の時間は全席禁煙となっておりますが、よろしかったでしょうか？」

その日の夕方・・・アネットに紹介されたファミレスにおいて、爽やかな笑顔で接客に精を出すテオドールの姿があった。

結局テオドールが興味を持ってそうな・・・というかまともな部活動が存在しなかった事と、やはりアネットを見習って自分の小遣い位は自分で稼いで、少しでもリズの両親の負担を減らしてやりたいというテオドールの思いから、こうして放課後にバイトをする事になったのだ。

ただこの件をテオドールがリズの両親に話した際、以前テオドールが

「高校を卒業してから自立する為の資金を貯めたい」

という話をリズにしていたので、テオドールが家を出る事を断固阻止するつもりのリズが、当然の事ながら猛反発する事態になってしまった。

そしてリズも同じ店で一緒にバイトする事、高校を卒業してからもずっとこの家で暮らす事をテオドールに無理矢理納得させ、誓約書まで書かせた上で、こうしてテオドールのバイトを容認したという経緯になったのだ。

「お兄ちゃん、3番テーブルのチーズハンバーグのAセット、準備出来たよ。」

「了解、あとこれ、4番テーブルのお客様のオーダーな。」

「2番テーブルの海老とクリームのリゾット、あと5分で上がるからね。」

「おう。」

料理が得意なリズが調理を担当し、テオドールが接客を担当する・・・今の所は順調に客を捌けているのだが、それでもテオドールもリズも正直言って汗だくになってしまっていた。

今は夕食時のピークの時間帯という事で、休む暇もなく次から次へと客が入ってくる。

当然、どこのテーブルでどんな注文があったのかという事を、接客担当のテオドールは常に完璧

に把握しておかなければならないし、それも追加注文が入ったりでリアルタイムでどんどん状況が変わっていく。

また調理担当のリーズも次から次へと注文が入ってくるので、1つの注文だけに集中して調理する訳にもいかない。調理の状況を見ながら注文に応じて臨機応変に動かないといけけないのだ。

息つく暇も無い程忙しい・・・店長が人手が足りないと嘆いていたのも頷けるという物だ。
正直言ってテオドールもリーズも、ファミレスのバイトを軽く見ていた。
リーズの父親が昨日の夜、

「2人が今の内に社会勉強するのも悪くないかもしれないな」

などとテオドールとリーズに言っていたのだが、こういう事だったのだ。
これが仕事なのだ。これが働くという事なのだ。
仕事として給料を貰う以上は、遊び感覚で作業をする訳にはいかない。
当初はリーズもアネットにテオドールを取られたくないからと、半ば監視目的でこのバイトを始めたのだが、作業を始めてから5分もしない内に、もう完全にそれ所では無くなってしまっていた。

「おい嬢ちゃん、服に糸くずが付いてるぜ。ほらよっと。」
「きゃあっ!？」

ガラの悪そうな男たちのグループの1人が、注文を聞きに来たカティアの胸に触ってきた。
慌てて男たちから離れたカティアが、涙目になりながら男たちを睨みつける。

「な、何をするんですか!？やめて下さい!!」
「おっとっと悪い悪い。つい手元が狂っちゃった。ぎゃはははは。」

以前テオドールにお姫様抱っこをして貰った時とは違う・・・カティアの全身に走る強い悪寒。
男たちの邪な笑顔を見て、カティアは言いようの無い気持ち悪さを感じていた。
同じ男の人なのに、どうしてこんなにもテオドールさんと違うのかと。
今も男に触られたカティアの胸に残る、男たちの悪意。それがどうしようもなく気持ち悪い。

「お客様!!そのような迷惑行為を店内でなさるのは困ります!!」

そんなカティアの危機を察したテオドールが、思わず女子高生への接客を放り出してしまい、カティアを庇うように男たちの前に立ちはだかった。
そしてテオドールからのアイコンタクトを受けたリーズが頷き、迅速に警察への通報を行う。

「あんだてめえ・・・俺らになんか文句でもあんのかよ。ああ!？」
「ここは風俗店ではありません!!女性スタッフへの接触行為は固くお断り致します!!」

男たちは露骨に不満そうな表情でテオドールを睨み付けるが、テオドールもまた一歩も引かずに男たちを睨み返す。

正直言って怖い。足がガクガク震える。自分は何か格闘技を習ってるわけでもないし、特に喧嘩が強いわけでもない。それに1対1ならともかく相手は3人もいるのだ。

だがここで引いてしまえば、カティアの心に一生消えない深い傷を残す事にもなりかねないのだ。どれだけ恐怖を感じようとも絶対に引く訳には行かなかった。

どんな手段を使ってでも、絶対にカティアを守らなければ。

「テ、テオドールさん…。」

「おいおい俺はこの嬢ちゃんの服に糸くずが付いてたから、親切に取ってやろうとしただけだっつーの！！わざとじゃねえのに、何でてめえなんぞに文句を言われねえといけねえんだよ！？」

「それならば彼女に糸くずが付いていると、ただ忠告をするだけでも良かったのでは！？何故わざわざ彼女の身体に触るような真似をしたのです！？」

「だからわざとじゃねえつつってんだろうが！！この店を訴えるぞコラァ！？」

「ええどうぞ自由に！！それで不利になるのは、むしろ女性スタッフの身体への不必要な接触行為を行った、お客様の方だと私は判断しますが！？」

真剣な表情で一步も引かないテオドールを前に、遂に男の1人がブチ切れた。

突然立ち上がってテオドールの胸倉を掴み、1発殴りつける。

それを目撃した他の客たちが騒ぎ出し、店内に悲鳴が響き渡った。

「がはあっ！！」

「お前マジでムカツクから死刑な。」

「お、おいお前、さすがにそれはやべえって！！単にあの女をからかってやるだけの話だっただろうがよ！？」

「だってこいつマジでムカツクだろうがよおっ！！」

仲間たちが必死に男を止めるが、頭に血が上った男はもう完全に止まらなかった。

カティアの壁になり必死に立ち上がるテオドールの腹に、今度は強烈な膝蹴りを食らわせる。

凄まじい衝撃。胃液が逆流する。テオドールは嗚咽しながらその場に崩れ落ちた。

「うっ…がはっ…！！」

「テオドールさん！！テオドールさあんっ！！」

泣きながらカティアがテオドールの傍に駆け寄るが、それでもテオドールは強い信念を秘めた瞳で立ち上がり、男たちを睨みつける。

その凄まじい気迫の前に、男たちは思わず一瞬たじろいてしまった。

「…お客様…女性スタッフの身体への接触行為だけではなく…今度は私への不当な暴力行為…一連の出来事は全て、店内の監視カメラに収められております…！！」

「…な…監視カメラだと！？」

「それに私の妹が…既に警察への通報を済ませた所です…お客様がどうあがこうが、最早弁明の余地など微塵もありませんが…っ！！」

テオドールの言葉が終わると同時にキッチンから駆けつけてきたリイズが、テオドールに暴力を振るった男の胸倉を掴み、全身から凄まじい漆黒のオーラを放ちながら、そのまま男を物凄い形相で睨み付けた。

その凄まじい威圧感を前に、男は思わずお漏らししてしまったのだった…。

「ひ、ひいっ！？」

「…アンタ…私のお兄ちゃんに暴力を振るったのもそうだけど、カティアちゃんにまであんな酷い目に遭わせるなんて…万死に値するわ！！」

「な、何なんだよお前！？何そんなにマジになってんだよ！？たかがそいつの胸をちょっと触っただけひぎいっ！？」

壁ドン！！

リズは物凄い勢いで男を壁に叩き付け、情けない表情の男を汚物を見るかのような瞳で睨み付ける。

「・・・アンタにとっては大した事無いかもしれないけどね・・・アンタのせいでカティアちゃんは凄く気持ち悪い思いをしたんだよ・・・？女の子にとって好意を持たない男の人に身体を触られるっていう事が、どれだけ苦痛を伴う物なのか知ってる・・・？」

完全に腰を抜かしてしまった男の顔に、リズはぺっ、と唾を吐きつける。

「・・・この下衆野郎共が。もう二度とこの店に顔を出すな・・・殺すぞ。」

そしてようやく近くの交番から駆けつけてきた警察が迅速に男たちを拘束、そのまま手錠を掛けてパトカーへと連行していったのだった。

何とか無事に切り抜けた・・・安堵してその場に座り込んでしまったテオドールを、リズが有無を言わずに物凄い勢いで抱き締める。

「ちょ、リズ、おま・・・」

「お兄ちゃんの馬鹿馬鹿馬鹿あつ！！」

先程までとは一転して物凄く泣きそうな表情で、リズはテオドールの顔を自らの豊満な胸に埋めたのだった。

その温かい温もり、とてもいい匂い、そして胸の柔らかさに、テオドールは思わず赤面してしまう。

余程テオドールの事が心配だったのだろう。自分の顔を抱き締めるリズの両腕が震えているのを、テオドールは敏感に感じ取っていた。

「カティアちゃんも大丈夫だった！？怪我は無い！？」

「は、はい、私は何とか・・・」

「本当にあいつら最低よね！！カティアちゃんの胸いきなり触るなんて、もうマジであいつら死ねばいいのに！！」

本気で自分を心配してくれるリズを目の当たりにして、とても申し訳無さそうな表情を見せるカティア。

その3人のやり取りを、他の客たちがとても興味深そうに眺めている。

中には携帯電話やスマホを取り出し、ツイッターや2ちゃんねるで実況する者たちも。

「・・・ふうん・・・彼が叔父さんが言っていたテオドール君かぁ・・・気に入ったわ。」

そしてカティアを助けに行ったテオドールに接客をほったらかしにされた女子高生が、意味深な笑顔でテオドールの事を見つめていたのだった・・・。

4. 反省会

その後、昨日に引き続いてまたしても警察からの事情聴取を受ける羽目になってしまったテオドールとリズは、担当した警察官から「また君たちなのか」と苦笑いされながらも、無事に事情聴

取を終えて何とか無事に業務に復帰した。

だが今日の業務が終わってタイムカードを押した後に、テオドールたちは今回の一件で店長から呼び出される羽目になってしまった。

店長が言うには、このファミレスの運営会社の幹部の人が、たまたま偶然あの場に居合わせていて、あの時のテオドールとリズの対応について話をしたいとの事らしい。

「4人共早く帰りたいでしょうに、本当に御免なさいね。役員の人がどうしてもテオドール君たちと直接会って話がしたいって聞かないのよ。」

「いえ、俺らは別に構いませんが・・・あの、俺とリズの対応が何か上で問題になったとか・・・？」

「う～ん、私はむしろテオドール君もリズちゃんも頑張ってくれたと思うんだけどね。」

テオドールたちを採用したこの店の店長は、とても物腰の柔らかくて落ち着いた雰囲気、心優しい女性だった。

とても穏やかな笑顔で、テオドールたちにコーヒーを差し出してくる。

そして緊張した面持ちのテオドールを、横から不安そうな表情で見つめるカティア。

何も出来なかった。ただテオドールとリズに守られて怯える事しか出来なかった。

テオドールのように身体を張って相手を守る事も、リズのように迅速な警察への通報や、迷惑行為を行う客を追い出す事も出来なかった。その事実がカティアの心を深く締め付ける。

テオドールさんがこの店で働くと聞いたから、私も・・・そんな軽い気持ちで始めたバイトだったが、今回の件で自分の情けなさを思い知らされる結果となってしまったのだ。

「・・・私のせいで、テオドールさんとリズさんが解雇なんて事になったら・・・。」

「おいおいカティア、そんな事あるわけねえだろ。むしろ俺らは被害者・・・。」

コンコンコン。

テオドールが言いかけた瞬間、ドアから軽快なノックの音が聞こえた。

そして店長に促されて入ってきたのは、とても爽やかそうな印象のスーツ姿の若い男性だった。

男性は店長に案内されてテオドールたちと反対側の席に座る。そして店長が男性の隣に座るような形になった。

「4人共待たせてしまって悪かったね。本当はすぐに君たちと話をしたかったんだが、別の店でもちょっとしたトラブルがあってね。その対応があったせいでこんな時間になってしまった。」

「いえ、俺らは全然大丈夫ですけど・・・あの、貴方は・・・。」

「これは失礼、自己紹介がまだだったね。僕はこういう者だ。」

男性は穏やかな笑顔で、テオドールたちに名刺を差し出してきた。

そこに書かれていたのは・・・。

「・・・ベルンハルト・コーポレーション株式会社・総務部部長・・・ユルゲン・・・ベルンハルト！？」

「君たち兄妹の事は妹からよく聞いているよ。テオドール君、リズ君。」

「ベルンハルトって、まさかアイリスのお兄さん！？」

名刺を覗き込むテオドールを、ユルゲンはとてもニヤニヤしながら見つめていた。

歳が離れた兄がいるとは彼女から聞かされてはいたのだが、どんな仕事をしているのかまでは聞かされていなかったし、テオドールも特に深入りしようとは思わなかった。

それがまさかこんな所で、こんな形で会う事になろうとは。

アイリスディーナの兄だと聞いたリズが、全身から漆黒のオーラを放ちながら、ユルゲンの事を物凄い形相で睨み付けている。

「さて、君たちも不安そうな顔をしているから、最初にその不安を吹き飛ばしてやろうかな・・・今回の件で君たちに処分を下す事は一切無いから、その辺は安心して欲しい。」

「ほ、本当ですか!？」

「勿論だ。これからも是非この店で働いて貰えると嬉しいな。」

「それは俺としても願っても無い話です。両親に自分の小遣いは自分で稼ぐって豪語したばかりですし、それがいきなり解雇なんて事になったら、とても両親に顔向け出来ないと思ってましたし・・・。」

「最近では少子化の影響からなのか、バイトの確保も中々ままならない状況でね。僕としても君たちのような優秀なスタッフには是非残って貰いたいんだよ。」

取り敢えず、いきなりバイトをクビにならずに済んだ・・・テオドールはホッと胸を撫で下ろしたのだった。

あの時の自分の対応に間違いがあったとは思っていないが、それでも上層部の気に障るような何かをしでかしたのではないかと・・・そんな不安をずっとテオドールは感じていたのだが。

「まあそれでも今回の件に関しての君たちの対応に対して、全く問題が無かったという訳でもないんだ。それに関しての反省会はきちんと行わないといけない・・・それは分かるよね？」

「・・・は、はい・・・。」

「店長から聞いていると思うけど、僕もたまたまあの場に居合わせていてね。君たちの対応を遠くから見させて貰っていたんだ。」

ユルゲンの言葉で、またしても緊張の表情になってしまったテオドールたち。

いくら今回の件でクビにならずに済んだと言っても、それでも反省会という言葉が出てしまっただけは、やはり緊張せざるを得ないというのが実情だろう。

ユルゲンもそれは察しているようで、テオドールたちを必要以上に不安にさせないようにと、とても穏やかな表情でテオドールたちを見つめている。

「まずはテオドール君に関してだけでも、身を挺してカティア君を守ったのは結構なのだが、それで接客中の女性に対して何の詫言も入れずに、無言で接客を放棄したのはまずかったかな。」

「・・・そ、それは・・・急な事だったので、つい・・・。」

「うん、気持ちは分かるよ。だけどああいう状況だったとはいえ、無言で放置された彼女は決していい気分をしなかったと思うよ。せめてすみませんの一言があれば違っていただろうけどね。」

「・・・はい。」

「それと自己犠牲の精神は結構だが、自分の身はもっと大切に扱いたまえ。君が傷ついた事でリズ君もカティア君も泣いていただろう。」

確かにユルゲンの言う通りだ。身体を張ってカティアを守ったのはいいが、それでリズとカティアを泣かせてしまったのも事実だ。

あの時、殴られる前に監視カメラの存在を男たちにほのめかしていれば、また違った結果になっていたかもしれない。

誰かを守るのは確かに大切だが、自分が傷つかないように尽力するのもまた大切な事なのだ。

自分が傷付いた事で、自分を慕う誰かを悲しませる事になってしまうのだから。

「次にリズ君なんだけど、事件が起きてから警察への通報を的確に済ませた、君の冷静さや判

断力、そして迷惑行為を働いた彼らを退けた胆力は評価出来るんだけど……。」

「……。」

「……その……幾らお兄さんが殴られて腹が立ったからといって、お客様が見ている前で唾を吐いたり、殺すとか暴言を吐くのは、さすがにちょっとまずかったかな。」

ユルゲンに指摘されたリズの全身から、漆黒のオーラが消え失せたのだった。

確かにあれを見た周囲の客が、リズやこの店に対して悪い印象を持ってしまってもおかしくは無い。あれで迷惑行為を働く男たちを追い出せたとはいえ、接客業を営んでいる以上は決して褒められた行為ではないだろう。

とても落ち込んだ表情で、思わずうつむいてしまうリズ。

「アネット君はテオドール君の事が気になって調理を止めてしまったようだけど、気持ちは分かるが料理を待たされるお客様の事を考えると、決して褒められた行為ではなかったかな。」

「……はい……。」

「テオドール君とリズ君が警察への通報や、迷惑行為を働いた彼らへの対応をしっかり行っている以上、君は2人を信じて調理に集中すべきだったと思うよ。君の料理を待っているお客様がいるんだからね。」

あの時アネットはテオドールの事が気になって仕方が無かったのだが、それで結果的に客に料理を提供するのが遅れてしまったのだ。

飲食店が必要以上に客を待たせるなど、あってはならない事だろう。最悪の場合、客が怒って帰ってしまう事にもなりかねない。

「最後にカティア君なんだけど……まあ君は被害者の立場にある人間なんだけどね。だけど胸を触られた後、もう少し毅然とした態度を取って貰いたかったというのが本音かな。テオドール君も言っていたが、うちはファミレスであって風俗店では無いのだからね。」

「……。」

「まあいきなりあんな事されたんじゃ、気が動転してしまっても仕方が無いんだろうけどね。事件が起きた後の君の働きぶりは優秀だったし、気持ちの切り替えもきちんと出来ている。次から気をつけてくれれば何も問題は無いよ。」

運営会社の幹部を勤めているだけあって、ユルゲンの指摘は至極真っ当で的確な代物だった。決して4人を責めている訳ではないが、さすがに幹部としての言葉の重みが違う。

「……さて、反省会はここまでだ。次からはよいよ本題に入らせて貰うが……。」

「え？本題？俺たちをここに残したのは反省会の為じゃないんですか？」

「それもあるけど、それはあくまでもついでだよ。僕がここに来たのは君とリズ君に別の大事な話があるからなんだ。」

とても真っ直ぐな瞳で、ユルゲンはテオドールとリズをじっ……と見据えた。

いきなりの事に、思わずたじろいてしまうテオドールとリズ。そして……。

「……最初に言うておくが、これは君たちがアイリスの知り合いだから言うのではない。君たちの能力と働きぶりを見させて貰った上で言う事なんだ。それを肝に銘じて欲しい。」

「はあ……。」

「テオドール君、リズ君……2人共高校を卒業したら、うちの会社で正式に正社員として働くつもりはないか？」

「・・・はあああああああああああああああああ！？」

全く予想もしなかった話に、テオドールは思わず動転してしまった。
今日あんな事があったにも関わらず、それをいきなり正社員とか。
ユルゲンは穏やかな笑顔で、じっ・・・とテオドールとリズを見つめている。

「テオドール君。君はとても真面目で正義感が強くて勇敢な男だ。それにただ勇敢なだけの無謀な男ではなく、己の能力を弁えた上での冷静で適切な判断力も持ち合わせている。あの状況で混乱して下手な事をする者も多いというのに、君のような優秀な人材はそうそういる物ではないよ。」

あの時、客の男に殴られた時・・・テオドールは下手にカッとなって殴り返そうとせず、ファミレスの店員としての毅然とした態度を決して崩さなかった。

もしテオドールが男に手を出していたら、それこそ大問題になっていただろう。店としての信頼を失墜させ、最悪売り上げを落とす事にも繋がりがねなかったのだ。

「リズ君、君も同じだ。君は非常時に的確に動けるだけの冷静さと判断力、そして大の男が相手でも決して引かない胆力も持ち合わせている。それに君の料理の腕も実に見事だった。店長にレシピの改善まで提案してしまう程までにね。ただのバイトにしておくのは惜しい人材だよ。」

「あの、ちょっと待って下さい、まだバイトを始めてから1日目なのに、いきなり俺とリズを正社員にして・・・そんな事を急に言われても・・・」

「勿論返事は急がないよ。君たちの将来に関わる事だからね。今はこの店でバイトしながら高校生活を満喫してくればそれでいい。だけど前向きに考えてくれたら僕としては嬉しいな。」

いつまでも非正規のまま、正社員になれずに苦しむ者も多いというのに、それをいきなり正社員に誘われたのだ。テオドールとリズにとって、これ程ありがたい話はないだろう。

だがそれでもテオドールには、即答出来ない理由があるのだ。

「・・・その・・・誘ってくれたのは嬉しいんですが・・・実は俺も父さんから誘われてるんです。高校を卒業したら私の仕事を手伝わないかって。」

「そうか。君たちの父上は一体どんな仕事をしているんだい？」

「確か福祉関係の仕事だとか言ってました。勿論強制はしない、自分の信じた道を進めと言ってくれてるんですが・・・俺も正直どうしたらいいのか・・・。」

「先程も言ったが返事は急がないから、ゆっくり考えてくれればそれでいいさ・・・それじゃあ今日はこれで解散にしようか。4人共引き留めてしまって本当に悪かったね。良かったら僕の車で家まで送ってあげるよ。」

テオドールたちが店を出ると、もうすっかり日が沈んで夜になってしまっていた。

バイト初日から本当に色々な事があって大変だったが、それでも自分の小遣いは自分で稼ぐとリズの両親に豪語してしまっている以上、明日からも頑張らないといけなない。

だがテオドールがユルゲンの車の助手席に乗ろうとした、その時だ。

「・・・あ、やっと出てきた。もう、タイムカードを押してから出てくるのが遅いわよ。一体何をやってたのよ。」

先程テオドールに接客をほったらかしにされた女子高生が、む～っ、としながらテオドールに近付いてきたのだった。

テオドールも彼女の顔は覚えていたようで、とても申し訳無さそうな表情になる。

が挙がる。

そしてこの瞬間、ベアトリクススマホから鳴り響く着信音。

「・・・私よ。どうしたの？カトリーヌ。」

『すいません部長、たった今テオドール君に関しての新しい情報が届きました！！』

「新しい情報ですって？」

『画像送ります！！』

ノートパソコンに送られた画像が、スクリーンに映し出される。

それはたった今起こったばかりの、テオドールがキルケにキスをされる画像だった・・・。

「・・・へえ、中々やるじゃない彼。まさか他校の生徒まで虜にしちゃうなんて。ふふふ・・・。」

『なおテオドール君、リズちゃんの両名がアイリス先輩の兄君から、高校卒業後にアルバイトをしているファミレスの運営会社の、正社員として働かないかと誘われた模様！！』

「分かったわ。今日はもう遅いから貴方はもう帰っていいわ。明日も引き続き彼らのネタを探って頂戴。」

『了解しました！！あ、先輩、今日の昼食の日本料理、とても美味しかったです！！誘って頂いてありがとうございました！！それでは！！』

ベアトリクスが通話を終わると、シューター部の部員たちの騒ぎが一層大きくなってしまった。

特に今まで一度も女子にモテた事が無い男子部員たちからは、女子にモテまくっているテオドールに対しての凄まじい嫉妬と憎悪が激しくなっている。

まさか他校の生徒にまで手を出しやがるとは・・・！！

絶対に許さない。絶対にだ。

しかも卒業後の就職先まで確約とか、どんだけリア充なんだよ！？

ギャルゲーの主人公かよ！？

ば・・・馬鹿にしやがって・・・！！

そんな男子部員たちの厳しい言葉が、スクリーンに映し出されるテオドールの画像に浴びせられたのだが。

「・・・恋愛原子核ね。」

ベアトリクスの言葉と同時に、部員たちの騒ぎが一瞬にして静まり返ってしまった。

聞き慣れない言葉を前に、部員たちは意味が分からずに動揺してしまう。

「中学時代は全然女子にモテなかった癖に、何故か高校に入ってから急にモテ出した・・・それも常識では有り得ない程の物凄い勢いでね。今のテオドールと全く同じ境遇の男子高校生が、日本にも1人存在していると聞いた事があるわ。」

「そ、それは一体どういう人物なのでしょうか！？」

「横浜にある高校の生徒らしいわよ。確か白銀武と言ったかしらね。彼は幼馴染や数人のクラスメイトだけではなく、担任の女教師にまで好意を持たれているという話よ。」

「・・・なん・・・だと・・・！？」

「さらには御剣(みつるぎ)財閥の跡取りである双子の姉妹までもが、彼と添い遂げる為になんか他校から転校までしてきたんだとか・・・。」

そのベアトリクス言葉に、モテない男子部員たちの騒ぎが一層大きくなってしまった。
羨ましい…憎い…妬ましい…そんな凄まじい憎悪と嫉妬が、遠く離れた日本にいるその男子生徒にまで向けられてしまう。
そんな男子部員たちの情けない姿を、ベアトリクスは意味深な含み笑いをしながらマジマジと見つめていたのだったが…。

「あの…て言うか、何で先輩がそんな事まで知ってるんですか？」
「…貴方が気にする事…？」
「し、失礼致しましたあっ！！」

ドヤ顔でベアトリクスに睨まれた男子部員が、その鋭い眼光の前に萎縮してしまい、思わず両手でちんちんを押さえてしまったのだった。

「彼があまりにも非常識なまでに女子にモテまくるもんだから、その横浜の高校に赴任している女性教師が、興味本位で彼を研究したらしいんだけど…彼の女性を引き付ける魅力は細胞レベルにまで達している…その女性教師は彼の内に眠る力を『恋愛原子核』と名付けたそうよ。」

「恋愛…原子核…」

「テオドールも彼と同じね。別に意識して女子を口説こうとしている訳でもないのに、何故か女子の方から彼に大勢近付いてくる…これはもう才能とかいうチンケなレベルの話ではないわ。彼の存在その物が女子の心を虜にしてしまうのよ。まさしく彼もまた恋愛原子核の持ち主よ。」

うおおおおおおおおおおおお！！
テオドール許すまじ！！
俺も恋愛原子核が欲しい！！
う…羨ましい…！！
あいつマジで何様のつもりだよ！？

テオドールに対して嫉妬と憎悪の感情を顕わにする男子部員たちを、ベアトリクスは「うっわー、こいつらマジでだらしねー(笑)」とか思いながら見つめていたのだったが。

「で、本題はここからなんだけど…まだ公表はされてないのだけれど、今週の土曜日にヨアヒム先生が料理対決を開くという情報を掴んだの。」

「料理対決？しかも今週の土曜日って、そんな急に何でまた…」

「優勝者には翌日の日曜日に、テオドールとデートする権利を与えられるらしいのだけれど…。」

一瞬の静寂の後、部員たちが思いもしなかった事に、戸惑いの表情でどよめいたのだが。

「…その料理対決…私も出場するわ。」

ドヤ顔で宣言するベアトリクス言葉に、部員たちの騒ぎが盛大に大きくなってしまったのだった…。